

「環境・共生・協働のコミュニティ — 教会の将来 —」研究会

宗教者と宗教施設の役割と可能性を考える
感情と環境とナラティブと

勝野 秀敏

はじめに

今般、思いがけず富坂キリスト教センターからお声がけいただき、「環境・共生・協働のコミュニティ—教会の将来—」という研究会に参加させていただくことになった。はじめにお断りしておかなければならないが、筆者は静岡の片田舎にある禅寺を拠点に地域コミュニティの中で活動している禅僧であり、キリスト者ではない。キリスト教について深く理解しているわけではないし、神学的に語ることもできない。また、研究者でもないため、研究論文のような論拠を示した論を書くことも叶わない。ここでページを閉じようとする向きの方もあるかも知れないが、おそらく非キリスト者である筆者が呼ばれたなりの理由もあり、少しだけお付き合いいただきたい。たとえば、この研究会の主題は以下の通りとされている。ⁱ

- センターの目的である「真の平和のために地域からコミットしていく」を目指す。
- 「コミュニティ」という主題（環境・共生・地域・協働）をどのように捉えるか。
- これらの主題は、地域で起こっているため、それぞれの地域でそれぞれの課題に取り組む人がメンバーとして集まった。
- メンバーそれぞれが持ち寄った事例や課題を傾聴・理解し、そのたびごとに主題を確認する。
- 「コミュニティ」を理論的・実践的に問い、「コミュニティ」の成立・持続に求められるものは何かを明らかにし、ビジョンとして提言していく。
- 人類・地球のコミュニティの危機をどうしていくか。その中でなお、一人ひとりのいのちがどのような祝福されるか。また「ともに喜び共に泣く」（ローマの信徒への手紙）という生き方を大切にしていきたい。
- 教会からコミュニティ（地域社会・自然環境）について考えるだけでなく、地域環境から教会にどのような問いかけがあるかも大切にしていく。

この主題に沿うならば、筆者に求められている役割は、教会と寺院という違いはあれども、同じ宗教施設を預かる宗教者として地域の中で人々から、また現代的課題に対してどんな役割が求められているのか、どうしたらその役割を果たすことができるのか、必ずしも信仰や価値観を共有しない方を含めた地域の中でどんなコミュニティを作っていくことが地域の人々の幸せに寄与できるのかについて、卑近ではあるが自らの実践的経験から考察して提示することではないかと考える。筆者は禅寺の住職として一代のテーマを「分福（ぶんぶく）」と決め、「感情の見える化」「感情のわかちあい」を考え続けながら、地域を基盤としたコミュニティの中で、子ども寺子屋や地域の共生食堂などの活動を行ってきた。社会福祉の言葉を借りて言えば、幸福や苦しみといった「感情」は、すべて「人と環境の相互作用」ⁱⁱによって生まれる。この研究会は、宗教者や宗教施設が、人々にとってどんな「環境」であろうとするのかを問う研究会と考えた。社会情勢と世代の変化により、宗教者と宗教施設を取り巻く状況と眼差し、そしてコミュニティの様相が大きく変化していることは、田舎寺でも肌身で感じている。宗教はある時代まで、定数・変数で言えば「定数」の側にいられた。人々が宗教の側に合わせることが幸せと考える時代はあった。しかし、人々を取り巻く状況や価値観が大きく変わり液状化する中で、宗教も「変数」となることが求められている。本質は変わらなくても、表現の仕方を変えなければ、届けたい本質が届かない。キリスト教と仏教を比較して優劣を問うつもりはなく、ひとりひとりの人間がそうであるように、異質であることを認め合いながら、目の前の人の幸せを願い、救し、支え、尊厳を守り認めるといった祈り・願いの根本、そして課題への対応策は共有できるものと信じている。どうか対話のきっかけとして、しばし耳を傾けていただければ幸いである。

キリスト者への敬意と花との出逢い

余談だが、最初にキリスト者の皆さまへの思いを記しておきたい。筆者は、認定臨床宗教師ⁱⁱⁱとして超宗教・宗教協力の下、病院の緩和ケア病棟やがんサロンなどで活動している。その経験の中で、医療や福祉の現場でたくさんの方と出会い、「協働」の機会を頂いてきた。目の前のひとの苦しみに向き合いながらその幸福を願い、愛情深く献身的に活動するキリスト者の方々の姿にはいつも心洗われ、感化されている。また、地域コミュニティで活動していく中で福祉を学ぶ必要性を感じて、コロナ禍の時期から日本福祉大学で社会福祉を学び始め

たが、世界でも日本でもセツルメント^{iv}の設立などキリスト者の先駆的な社会救済事業の働きは数え上げれば枚挙にいとまがないほどであることを知った。同じ宗教者としてただただ頭を垂れる思いでいる。現代に於いても、クリミア紛争やパンデミックといった不安定な世界情勢の中、16年に渡って欧州の安定に寄与したアンゲラ・メルケルは筆者の最も尊敬する政治家である。常に理性的で倫理的だった彼女の政治的信条が旧東ドイツの牧師の娘として生まれた敬虔な信仰的確信によって培われていることは疑いがないだろう^v。

また、「慈愛の見える化」に気づかせてくださったのもキリスト教だった。筆者は2016年に東北大学の臨床宗教師養成の実践宗教学寄附講座を受講した。そのプログラムの中に医療施設など臨床の場でケア対象者と会話して、その内容と自分の感情がどう動いたかを記録して提出するという課題があった。仏教や地元から離れて学んでみたかった筆者は、チャプレンとしてのシスターがいる仙台のキリスト教系ホスピスで実習を受けさせていただいた。そこでの経験はかけがえのないものとなった。3日間のプログラムだったが、初日も2日目も患者様と話すことが許されず、シスターやボランティア担当者による座学と、後は一般のボランティアの方といっしょに病室や廊下に飾られた花瓶の水替えをするだけだった。2日目になると焦りが出る。このまま実習が終わり課題を提出できなかったらどうしよう。そんな不安を持ちつつお花を差し替え、花瓶を廊下に戻そうとすると、目に入ったお花のない空間が寒々しいものを感じられた。それが、お花を飾るだけでとても温かく優しく清らかな空間に変貌したことに本当に驚いた。考えてみれば、一般のボランティアの方も患者様に直に接することは少ないが、このお花には患者さんの幸せを願うボランティアの方の思いが込められている。そう思うと、これまで花を花としてしか見てこなかったことに気づかされ、愕然とした。3日目には無事に患者様とお話することを許され、会話記録の作成もできたが、それ以上に花との出逢いと気づきは鮮烈なものだった。そして、静岡に戻り、観音さまに向き合うと両脇に花が飾られているのが目に入り、その意味がとても沁みてきた。花に込められた思いに気づかせてくれたのは、キリスト教だった。このような経験から、まずはキリスト教とキリスト者への敬意と感謝をお伝えしておきたい。

「コミュニティ」と「ナラティブ」と「感情」

主題にもある「コミュニティ」という言葉を耳にしたとき、最初に何が思い浮

かぶだろうか。筆者は、お寺を支えてくれる長老方や寺子屋に来るこどもたちの顔がまず浮かぶ。「コミュニティ」とは、具体的な人と人とのつながりであるはずだ。しかし、主語を外して「地域コミュニティ」という言葉で考えれば、子どもたちや長老方は、筆者の知らない友だちや親戚とも、それぞれつながって暮らしている。「コミュニティ」なるものに実体はなく、目には見えないそれぞれの人同士の人間関係、もっと言えばそれぞれの「感情や信頼関係」があるだけだ。そして、その「感情や信頼関係」は「なまもの」で刻々と変化している。また、彼らにとって、筆者や筆者の預かる宗教施設（禅寺）は、あくまで「環境の一部」でしかない。

この論では、客観的な調査による研究ではなく、「地域コミュニティ」で共に暮らす住民たちを巡る、筆者の目を通した「ナラティブ」（主観的な語り）を柱にして、考察を進めていく。地域に住む人々の幸福を思うとき、相手の生の「感情」を抜きには考えられない。幸福とは「感情」だからだ。また、行政が当事者に相談することなく恣意的に「こういう環境を作ることが当事者の幸せにつながるはず」と考えて施策を実行すると、失敗に終わることが多い。宗教者も同じで、当事者の「感情」に目を向けずに「よかれと思って」と傷つけてしまう失敗は、往々にして起こりうる。また、筆者には仏教徒・禅僧という背景がある。これから述べる考察に、仏教、特に一如不二という自然観や、あるがままに見ることを目指し、拗って立つものを持たないという禅宗特有のものの見方が影響するであろうことは否定できない。無知が故に、意図せず誤解を生み出してしまう可能性を覚悟しつつ、キリスト教への敬意を根底に持ちながら論を進めることをお許し願いたい。

「正しさの暴力性」と「傾聴」による救い

筆者は、静岡市清水の山あいにある龍津寺という禅寺に生まれた。寺に生まれた子のことを仏教では羅子（らご）と呼ぶが、いわゆる二世である。「地域コミュニティ」とは難しいもので、それぞれの世代や立場で全く見方が異なる。筆者が生まれた時代の高齢者であった明治から昭和一桁生まれの世代は、お寺の子というだけで「できる子」「偉い子」と見做して、いわゆるハロー（後光）効果で褒め称えたが、親世代である団塊世代は自分子どもと比べられるのが逆に面白くなく家庭内で陰口を言う大人も存在したため、中にはお寺の子というだけで苛めてきた子たちもいた。周囲には、ひどいイジメもたくさん散見された。1980年代は人権意識もまだまだ薄く、当事者の本質とは全く関係ないところで、属性で勝手に価値を決めつけられることが多い時代だった。

先代である父は真面目で寡黙な禅僧で、子としても尊敬していたし、地域の信頼も厚かった。そんな父が50才で癌になり、一年半の闘病生活の末、亡くなってしまふ。高校生だった筆者は世界の半分が閉じてしまったような感覚に陥り、家族関係も不安定で難しい状態となり、とうとう学校に行けなくなって部屋に引きこもるようになってしまった。当時、周囲の方々は励ましてくれたが、社会的・道徳的・宗教的「正しさ」は却って人を苦しめることもある。「頑張れ」という励ましや「しっかりしろ」「前向きに」という叱咤などの「正しさ」は、父の死を受け止められず頑張れずしっかりできず学校にも行けず笑うことさえできなくなっていた少年には辛かった。今の自分のありようを否定されているようで、暴力的にさえ感じられた。また、不登校になった成績不良者に進学校の対応は冷たく、ほとんどの教師は見て見ぬふりをした。自分が壊れかけて命の限界を迎えていたある夜、信頼できる友人に電話をして、十数キロ走って会いに行き、屋外で数時間夢中で話をしたことがある。何を話したかはまったく覚えていないが、ありがたいことに彼はただ黙って鎮きながら話を聴いてくれた。また、ある恩師の先生が一人だけいつも気に掛けてくれ、「勉強しろ」とか「学校に来い」などと言わずに「どうだ?」と声を掛け続け、会えばひとしきり話を聴いてくれた。苦しみの中にあること、できない自分をそのままに認めて許してくれた。信じて待ってくれた。そのおかげで、なんとか命をつなぐことができた。

目には見えにくい「孤」への気づき

その後、大学を経て京都の道場へ禅の修行に入り、30歳手前で龍津寺に戻ってきた。お寺を地域に開かれたものになろうとお祭りやコンサート、寺カフェなどいろいろイベントにも取り組んだが、なんとなく一過性のものに感じられてしっくりするものがなかった。その頃、近所の子どもたちがよく境内に遊びに訪れてくれていた。鬼ごっこをしたりかくれんぼをしたり、楽しく嬉しいひとときだったが、小学6年生ぐらいの女の子がよく膝の上に載ってきたりおんぶをせがんだり、少し気になるスキンシップを図ってくることがあった。彼女には幼い兄弟や近所の子まで面倒見ている、とても世話を焼いていた子だった。よく事情を聴いてみると、彼女は父親を早くに交通事故で失っており、母親は三人の子どもを養うために朝から晩まで懸命に働いていて、彼女はの間ご飯を作ったり洗濯物をたたんだりして、一人で幼い姉弟の面倒を見ていた。今でいえばヤングケアラーで、彼女もまた「孤」を抱える一人だった。

「おっさん、わしゃ生きててもしょんないだよ。」

また、ある年の夏、お盆のお参りに伺った先で、ある長老から「おっさん、わしゃ生きててもしょんないだよ。」という言葉が掛けられた。一瞬ひるみ、どう言葉を返そうかと考えた。宗教者としてどんな言葉を返すのが「正解」なのか、思いあぐねたが言葉が見つからない。家族間の問題があるのかも知れないが、そこに触れてよいのかもわからない。次のお参りに行く時間が迫っている。そして、あろうことが筆者は「そんなこと言わないで頑張りましょうよ」という言葉を残して立ち去ってしまった。せっかく伸ばしてくれたその方の手を筆者は掴むことができなかった。お盆が終わって、その後もその方のことが気になりながらも、「宗教者としての答え」が見つからず、悶々とする日が続いた。自分が「孤」に悩み苦しんで、傾聴してくれた人のおかげで命をつなぐことができたにも関わらず、筆者は相手の言葉を傾聴せずに相手の「孤」をそのままにしてしまった。その方が自死されたという報が届いたのは、秋に入って間もない頃だった。

「同じ町に住んでいるから支え合いたい」（共生）

「孤」は外からは見えにくく、問題行動で表されなければ気づかれにくい。無知ということは恐ろしく、人の命さえ失ってしまうこともある。自らの無知を怨み、こんな自分が宗教者を名乗っていることを恥じ、ちゃんと心のケアができるようになろうと誓った。もう二度とこんな思いはしたくない、無力であることを自覚しながら相手の心に寄り添い、傍に居させてもらえるように。その方が苦しく誰かとその感情を分かち合いたい時に、せめて思い出してもらえる存在でありたいし、ちゃんと受け止められる自分でありたい。そんなことを考え、贖罪の思いと共に本堂に貼り出したのが、「同じ町に住んでいるから支え合いたい」という言葉だった。檀信徒であろうがなかろうが、年齢性別職業宗教国籍などの属性は一切関係なく、いっしょに支え合って生きていきたい。別に、筆者のような宗教者でなくてもいい、対象者と同じ「コミュニティ」に属する誰かが「聴いて、受け止めてくれば」との思いを強くした。そして、「コミュニティの質」を変えていくことが、地域における宗教者・宗教施設の役割と考え、筆者一代の活動テーマを「分福」と決めた。「分福」とは幸田露伴の努力論の中に説かれる惜福・植福・分福という三福論のひとつだが、「福を分かち合う」だけではなく、「わかちあえることが幸せ」という意味も込められている。そのわかちあいのタネは何でも構わない。喜びは勿論、悲しみであれ苦しみであれ、絶望でさえもいっしょにわかちあえれば「孤」

はひととき解消され、希望につながる。宗教施設の活用とは、わかちあいの機会をひとつでも多く設けていくことであり、宗教者の役割とは、「地域コミュニティ」に「わかちあい」の関係性を一層広く深く醸成していくことと思いついたのである。

「宗教協力」と「布教しない」ことの意味

上記のような思いに至ったのは、前出の東北大学の臨床宗教師養成講座（実践宗教学寄附講座）での学びが大きかった。臨床宗教師とは、被災地や医療機関、福祉施設などの公共空間（アウェイ）において心のケアを提供する宗教者であり、「布教や伝道を目的としないこと」「宗教間協力」を前提に、高度な倫理のもとに相手の価値観を尊重しながら宗教者としての経験をいかして、苦悩や悲嘆を抱える方々に寄り添う者の認定資格である。現在、キリスト教、仏教、神道、天理教など様々な信仰を持つ宗教者が「協働」して全国で活動しており、2024年に発生した能登半島地震でも多様な宗教者の会員により構成される中部臨床宗教師会が宗教間協力のもとに「協働」して支援活動を行っている。

「布教しない宗教者」という言葉に抵抗を感じる方も少なくないかもしれない。筆者の周囲でも同業者から「布教しない宗教者なんて」と揶揄する声が聞かれた。しかし、病院や学校などの公共空間で活動する場合、その公共空間のルールを遵守することが求められるのは当然である。病院などのアウェイの場にはアウェイのルールがあり、求められていない宗教の教えを説き始めたら、即退場である。そこでできることは傾聴しかない。当事者の声を聴く時、たとえばスピリチュアルケア^{vi}が求められる時、筆者の感覚では、鏡になることが必要になる。代受苦・共受苦をわかちあうとき、自らの宗教性は背中に背負って、前に出すことは考えられない。では、宗教者である必要はあるのか。その命題は、その個人によって問われる。「相手の価値観を尊重しながら宗教者としての経験をいかして」とあるが、相手の幸福を祈り、信仰を心に秘めながら傾聴していくと、それが目的ではないが、不思議と相手と感化し合う瞬間が訪れる。相手のスピリチュアリティ、当事者の持つ大切な深淵^{vii}まで一緒に下りることができるのは、信仰を持つ者ならではの力量とも言える。

地域での活動に「宗教性」を出すか否か

ところで、先にも挙げたように、セツルメントの設立などの社会救済事業を率先して行ったのはキリスト教である。実は、この公共空間である地域での活動に

宗教性を出すか否かは、古くからの問題であった。世界初の大学セツルメント施設として知られるトインビー・ホールは1884年ロンドンの貧民地区イースト・エンドに設立された学生ボランティアによる教育・福祉活動の拠点である。しかし、実はトインビー・ホールに対抗される形なのか、直前に「オックスフォード・ハウス」という宗教者によるセツルメントが設立されていたという事実があった。^{viii} 永住が見込めない学生による活動と、宣教を前提とした宗教者による活動のどちらが正しいのかの正答はなく、地域の当事者の「感情」と「選択」に委ねるべきものだろう。また、日本でも同様に「キリスト教系社会事業の地域化」について葛藤が存在した事例があり、とても興味深い。^{ix} ただ、どんな形が受け容れられやすいのか、どんなコミュニティを目指すのか、取りこぼされる人がいないかは宗教者としては気にしておかなければならない部分である。

お寺からの出家（アウトリーチ）

もうひとつ大切なことは、課題は宗教施設で待っていても解決できないことだ。昔、筆者は地域課題に向き合いたいと「お悩み相談何でも聞きます（無料）」と道路沿いに貼り出したことがあった。しかし、相談に訪れる方は誰もいなかった。当然だが、どこの馬の骨とも知れない禅坊主に、いきなり自らの根幹に関わる大切な悩みを打ち明けるはずがない。自ら地域に出て行って（アウトリーチ）自分を開示し、理解してもらうことで初めてコミュニティにコミットできるし、説教されないという安心感から初めて課題に触れることを赦してもらえるようになる。このアウトリーチを筆者は「お寺からの出家」と名付けて、属する宗派で提言している。^x

「語る宗教」と「聴く宗教」

では、ホームである宗教施設ではどうか。教えを説くことを前提にされている場所であるし、日曜礼拝や法話会など宣教伝道を目的とした機会では「説教＝語る宗教」が求められ、最も大切な要素であることは言うまでもない。定期的にお風呂に入って身を清めるのと同じように、定期的に教えの言葉に触れることで心を浄め、自らの生き方を確認・微調整することは宗教の根幹を成すものであろう。教えは、渴いた喉を潤す水にもなるし、病めるときには薬にもなる。「語る宗教」が、宗教たらしめる大切な要素であることは間違いない。

他方、信徒や地域住民からの相談時はどうだろうか。宗教者からの答えを求めているようで、実はそうでないことも多い。答えは当事者の中にあり、また死別

の苦しみなどの「答えのない問い」に対しても、答えを求めているわけではなく「わかってほしい」「共感してほしい」だけということも多い。こどもであれ大人であれ年齢性別など関係なく、目には見えない「孤・寂しさ」などの感情に耳を傾けて自分の感情を受け止めてもらえる存在＝「聴く宗教」が求められている時代なのではないか。聴いてもらえるとは、話している自分の感情がそのまま赦されることにつながる。キリスト教に「罪の告白」「告解」の仕組みがあるように、「聴く宗教」とは「赦す宗教」でもある。

「居場所」とは

手前味噌で恐縮だが、筆者は15年ほど前から「土曜子ども寺子屋」というものを開催している。月に2～3回のペースで子どもたちの自学習を大学生や社会人ボランティアの方と見守る簡単なものだが、ありがたいことに毎回子どもたちは30名ほど参加、ボランティアに至っては趣旨に共鳴してくれた大学生や社会人が50名以上も登録して、毎回7～8名の方が通ってくださっている。この寺子屋での先生方へお願いごとは単純なもので、「押しつけないこと」[※]である。子どもたちと対等に向き合い、傾聴・尊重して強制しない。ただそれだけで、子どもたちは伸び伸びし始める。また、筆者も仏教の話はほとんどしない。会の流れとしては、それぞれの先生方から近況と自己紹介を話してもらい、筆者からは論語の解説から「仁」（思いやりの心）を一年通して強調して伝え、もうひとつは日本国憲法の素読を通じて人権意識を養うようにしている。手を合わせたりお経を詠んだり、静坐をして心を調えたりもするが、しない子を咎めるようなことはしない。学校を通じて募集をかけていることもあり、例えば異教徒の方がいたとしても宗教性を押しつけることなく公共性を担保した中で「心の涵養」を図ればとの思いからの工夫である。昨今盛んに言われるようになった言葉に、「サードプレイス」というものがある。学校でも家でもない、役割や属性を離れて自分の言いたい言葉を言える場所、自分らしくいられる場所のことだが、それは「たとえ弱くて上手にできない自分」であっても、周囲が理解して赦してくれる「環境」があって初めて実現する。また、こうした赦された場所は、子どもたちだけでなく大人のボランティアにとっても居心地の良い居場所になる。「与える」「与えられる」関係でなく、「赦し合う」関係性が生まれて、「これでいいのだな」と思える「well-being」が生まれてくる。まなざしが変わるだけで「コミュニティの質」が変わる。宗教施設は、そんな「感情のわかちあい」から希望を生み出す「環境」になることが

できる。そして、そうした信頼できる場所は、いざ人生の窮地に陥った時、思い出して信じて頼ってもらえる「駆け込み寺」になることができる。

その他、「おじま分福食堂」という地域の共生食堂も開催しているが、これも「食」という根源的な営みの共有により、年齢問わず「わかちあい」の素朴な喜びや安心感を生み出すことができる。生命の維持に関わる「食」の保障は「感情」と並んで「人の尊厳」であり、人権保障にもつながる。また、「協働」での炊き出しは防災にもつながる体験で、定期的に行うことでいざという時の支え合いに生きてくるはずだ。

「ここにもいい条件」を作らない（共生）

自らが自律呼吸も難しいほどの難病当事者でありながら、障害者の地域での自立生活支援に人生を捧げた海老原宏美は、「共生＝インクルージョン・共に生きること」の要素として、「誰も排除しない」「誰も取り残されない」に続き、『「ここにもいい条件」を作らない』の3つを挙げている^{xiii}。宗教施設が「共生」を謳うとき、真に「無条件であるか」について宗教者は丹念に確認する必要がある。宗教施設であるが故に「あなたがここにいるために必要な条件」を、無意識のうちに設けてしまうことが多いからだ。そして、その確認・自省のために、宗教者は当事者の言葉に謙虚に耳を傾け、評価的態度ではなく受容的態度と共感的理解をもって相対する必要がある。同様に、もし宗教施設を共生の場にしていこうと思うのなら、地域住民に共有の場として開放していく必要があるのではないか。宗教者は宗教施設の管理者ではあるが所有者ではないし、実践は必ずしも宗教者だけが行う必要はない。地域住民との協働によることも食堂などは、宗教施設で開催するのに最もふさわしい取り組みであろう。前出のアンゲラ・メルケルは、社会の共生と教会の関係についてこう語っている^{xiiii}。

教会は人々に、故郷を、結びつきを、与えます。支えと進むべき方向、力と希望を与えます。そのことが、社会での共生にとって、教会を唯一無二の重要な存在としています。政治には代替できない分野があります。そのために、わたしたちは教会にも、世俗の世界に入り、良心と心の教育において人々を納得させてくださるよう、最善の協力をお願いしなくてはなりません。それがとても重要なことだと思いますし、それを促したいとも思っています。[アンゲラ・メルケル, 2018]

死から孤へ、信頼から不信の時代へ

ところで、今、人々や宗教施設を取り巻く情勢はどんな変化が訪れているのか、

少し俯瞰的に考えてみたい。仏教寺院には逝去した方の名簿である過去帳というものがあるが、江戸時代から1960年代に至るまで、毎年亡くなる方の半数は水子や乳幼児など子どもの名前であった。^{xiv} いわゆる多産多死の時代で、死は身近であり、生きることには「死別の苦しみ」を伴う時代が長らく続いてきた。地域の中で1970年代生まれの筆者たちを可愛がってくれた明治から昭和一桁世代の長老方は産中産後の死別を身近に体験しており、格別に人情深かった。それが、戦後に入り医療体制が整っていくと、多産少死を経て少産少死へと人口転換が起こっていく。団塊世代以降は生きていくことが当たり前になり、その生・命・存在の尊さへの実感は徐々に薄まっていく。

また、機械化により男性優位の「力」から「知識・情報」の時代へと変わり、その頭脳もAIに取って替わられる時代が近づいている。人に必要とされる役割は、効率化の名の下に日々機械に置き換えられ、生きがいや居場所が得にくい社会となってしまった。筆者は「感情=尊厳」と考えているが、それは、「感情」が人としての生の根本であり、誰にも否定されてはいけない、とても自然なものだからだ。もちろん、感情の赴くままに人を押しつけて行動することや感情のままの言葉をぶつけて人を傷つけることが許されるわけではない。行動にルールは必要だが、心中の感情はどこまででも自由でなければいけないはずだ^{xv}。

しかし、現代は人としての役割や「感情」の表出が許される場所が減ったことで自己肯定感を感じにくくなり、「孤」に陥りやすい環境を生み出し続けている。信頼できる「コミュニティ」をつなぐはずの言葉は、ネットによる言葉の氾濫と政治の劣化によってその価値は軽薄となり信頼感も低くなっている。「死から孤へ、信頼から不信へ」の時代である。

他方、人権意識の高まりは、まだまだ過渡期ではあるが、少しずつマイノリティの居場所を拓けようとしている。障害者を社会の側に適応できるように健常者に近づけようという「医学モデル」から、障害は社会の側にあると考えて、その相互作用により妥協点を見いだそうとする「社会モデル」への転換は、障害者の生きづらさからの解放へと向かわせている。これは歓迎すべきことだ。しかし一方、発達障害や自閉スペクトラム症が増えたのは、社会の側の変化による「障害化」の結果との指摘もある^{xvi}。社会から要請される能力の変化は、新たなマイノリティを生み出している側面もある。長らく封建制を前提としてきた宗教者は、前の項でも触れたように、目には見えない自らの無自覚の偏見（アンコンシャス・バイアス）に対して、いっそう敏感でなければならない。

宗教者・宗教施設を取り巻く環境

「力の時代」の終わり与人権意識の高まりと共に、封建的な風習や価値観もようやく少しずつ薄まってきている。しかし、その変化にいまだに対応できず人権意識の薄さを指摘されるのが「政治・教育・医療・宗教・軍隊」などの専門性が高く「先生」と呼ばれがちな分野である。密室でハラスメントが起きやすい側面もある。宗教施設は、ある時代まで知識や文化の最前線だったが、情報化の進んだ現代に於いては社会との乖離が進み、レガシーを守ることが務めのように人々の生活から取り残されつつある。よく仏教寺院は「近くて遠いところ」「お寺は好きだがお坊さんは嫌い」と揶揄されることがあるが、これは頼んでもいない説教をされて押しつけられる事への嫌悪感であろう。「変数」になることを拒み、上意下達の封建的な関係性を維持しようとするれば、次世代が離れていくことは当然の帰結である。

「言葉から実践へ」「教化から感化へ」

こうした時代の変化の中で、現代において宗教者には、地域住民と目線を合わせる形での「言葉から実践へ」「教化から感化へ」の転換が迫られているように思えてならない。

たとえば、苦しみの中にある人は人の言葉にとっても敏感で、こちらの浅はかな要領や薄っぺらな返答などはすぐに見抜かれてしまう。しかし、宗教的信念に基づいた傾聴などケアの「実践」は、水平的な関係性の中で受け手自らの理解・感受性に委ねられるため、受け容れられやすく信頼関係も生まれやすい。そして、「感化」されて生まれる次の誰かの行動は、他動的ではなく自発的なものであるため、より能動的・自立的・積極的なものになりやすい。「感化」とは、「ほっとけない」「せざるはいられない」というボランティアズムによる「感情の共鳴」で、その方自身の感情の発露となるからだ。

また、支えを必要とする人自身が、自らにとって何が課題なのかも自覚できないこともままあり、当事者の声によく耳を傾け、当事者を取り巻く「環境」をよく把握し、その上で声を上げられない当事者に代わって地域や社会に訴えかけ働きかける「アドボカシー」^{xvii}の役割も、宗教者が果たすべき大切な役割と考える。

「孤」を防ぐ愛・仁・慈悲は、その大切さを100回語るよりも、たとえ「1」でも実際に行動に表されることの方が大切で、市井の人々は、当事者の権利や感情を守るために汗する宗教者の登場を何より期待しているし、その姿にこそ人々は「感化」され、地域コミュニティも変わっていく。

「こんなかみさまにいてほしい」

筆者の考える理想の宗教者の姿は、ヨシタケシンスケ氏による絵本「このあとどうしちゃう」の中に描かれている。この絵本は、おじいちゃんを亡くしたばかりの男の子が、おじいちゃんの部屋で一冊のノートを見つげるところから始まる。「このあとどうしちゃう」。そう書かれたノートには、自分が将来死んでしまったら、どうになりたいのか、どうしてほしいのかが書いてあった。生まれ変わったらなりたいもの一覧。天国はこんなところであってほしい。イジワルなあいつはこんな地獄に行く。建ててほしいお墓のデザイン。そんな数々の妄想の中に、「こんなかみさまにいてほしい」^{xviii} というページが出てくる。それは、以下のような「かみさま」である。

注) ここで紹介する「かみさま」は、キリスト教の神様とは無関係であり、比較する意図はない。あくまで絵本の中の登場人物としてご理解いただきたい。

こんなかみさま (宗教者=隣人) にいてほしい (以下、数字と括弧内下線部は筆者加筆)

1. いままでのおもいでばなしをおもしろがってくれる (傾聴・受け止めてくれる)
2. 「じゅみょうってきまつてるの?」とか、しりたかったことをおしえてくれる (智慧や教え)
3. だれにもいえなかったことをきいてくれる (懺悔・告白・守秘・赦し)
4. 「アレはかみさまのせいなんじゃない?」とか、もんくがいえる (受容・やつあたりも受け止めてくれる)
5. あなたのたんとおかみさま、かみやます。 (個性・自分の担当の神さまになってくれる)
6. そらのとびかたをおしえてくれる (知的好奇心を満たしてくれる)
7. うたがうまい (楽しませてくれる)
8. いろいろそうだんにのってくれる (よろず相談・じぶんのために時間を作ってくれる)
9. ほっといてくれる (伴走・干渉せずに、でも、そばにはいてくれる)
10. しゅみがあう (共鳴・共感) (ヨシタケシンスケ, 2016, 7-8頁)

死は、誰ともわかちあえない孤独な作業だ。究極の「孤」である死と向き合う時、人は「一人であること」に否応なく向き合わなければならない。だからこそ、神通力での救済よりも、その寂しさをそのままにわかちあってくれる存在が描かれ

ているのであろう。そして、ここに描かれている姿こそ宗教者が担える役割・領域ではないだろうか。死の淵だけではない、生きている間ずっと、当事者の声を傾聴して、認め赦し、受け止めることができれば、「今日からあなたもかみさまになれる!」「明日からあなたもほとけさま! (これは微妙な表現だが)」

まとめ「社会の変革のために（宗教協力・協働）」

以上、同じ宗教施設を預かり、人の幸せを願う宗教者として、現代における究極の苦しみを「孤」と考え、その「孤」に向き合う宗教者と宗教施設の役割について考察を述べさせていただいた。

以下に、宗教者・宗教施設による「孤」に対する「ケア」としてまとめてみる。「対人」というミクロのレベルでは、「傾聴・受容・共感・赦し」「言葉から実践へ」「教化から感化へ」。

「地域コミュニティ」「宗教施設の活用」というメゾのレベルでは、「宗教施設を、属性を離れてなんでも聴いてもらえる＝話したいことを話すことができるサードプレイスに」「祈り・学び・感謝・懺悔・わかちあい・共生の場へ」「宗教施設での語る宗教を否定するわけではない」「宗教施設から出て苦しみのある場所・地域コミュニティに向いてアウトリーチして活動する」「コミュニティにおけるセトルメントの復権」「『ここにいていい条件』を作らない」。

そして、「社会に向かって」というマクロのレベルでは、「宗教間協力の下で・衣を脱いで＝公共性を担保しながら、共通性の高い理念を地域や社会に対して提言して社会の変革を促す役割を果たすべき」「アドボカシー・代弁・擁護の役割も担うべき」ということを述べておきたい。

表面には出てきづらいが、地域を見れば、子どもや高齢者への虐待、8050といった引きこもりや自死の問題、ヤングケアラーの問題など、社会のはざまである「孤」の中でさまざまに苦しむ人たちが大勢いる。さらに社会に目を向ければ、自分の人生を無価値なものとなして死を望み、確実に死にいたる方法として死刑執行を受けようとして通り魔的な犯行におよぶ、いわゆる『間接自殺』も増えている。

大正時代、仏教の現代化・寺院の地域開放・寺院のセトルメント化に尽力した浄土真宗僧侶の佐伯祐正は、仏教寺院を「公の家」「社会の家」と呼び、その活用を叫んだ^{xix}。その経営形態として、寺院と第三者が協力して実行する方法が寺院セトルメントとして最も有効であると考え、寺院と地域住民が協同することによって寺院は「共存共栄の道場」として住民に貢献できると確信したとされる。^{xx} また、

仏教者である佐伯の活動に深く共鳴し物心両面から支えたのが敬虔なクリスチャンでもあった志賀志那人だった^{xxi}。背景である信仰は異にしても地域住民への思いやまなざしを同じくするこうした草の根の宗教間協力や宗教施設の活用方法は、現代の宗教施設のあり方にも大きなヒントになる。

それぞれの宗教の独自性は大切だが、共有できる理念をエッセンスとして「孤」を生み出さないための仕組み作りのために地域や社会に向かって発信・提言していくこと、また実践の場を持つことで感化せしめていくことは、新自由主義の中で倫理的に堕ちつつある日本社会には重要なことで、それは公共性を担保した宗教間協力の中でこそ説得力を持つ。この研究会に筆者のような異教徒を呼んで下さったこともキリスト教会の公共性に大きな意味を持つのではないだろうか。

おわりに

今般、貴重な機会を与えてくださった岡田総主事・小田部座長のご英断に深謝申し上げます。また、執筆に大切なお助言をいただいた中井主事、拙い文章に最後までお目通しくださったキリスト者の読者の皆さまに心から感謝申し上げます。キリスト者でない筆者の役割は、自らの「地域コミュニティ」での経験を通して宗教者と宗教施設の役割について考察を述べることと考え、稚拙だが論を提示させていただいた。キーワードは「孤」「傾聴」「ナラティブ」「実践」「感化」「アウトリーチ」「宗教間協力」である。キリスト者の皆さまにどう受け止められたか、また自分の意図したことを十分に伝えられたか、いささか心許ない。また、いただいた主題の上では、地球環境、特に気候変動への対応という大きなテーマに関してはこの論では触れることができなかった。「コモンズの悲劇」^{xxii}ともいえる難しいテーマだが、だからこそ資本主義経済とは価値観を異にする宗教の「宗教間協力による主張・協働」こそが鍵になるはずである。このテーマについては他の会員の論を待つてあらためて考察を深めたい。

なお、皆さまにはご遠慮なく異論反論をお寄せいただけたらありがたい。そこから「対話」が始まるし、お互いに気づきと赦しと信頼、そしてコミュニティが生まれる。エキュメニズムの大きな船に非キリスト者も乗せていただけること（組織的ではなくても「感情の共鳴」を交えた「協働」の実現として）、そして地球上からあらゆる争いと競い合い奪い合いと「孤」が解消され、すべての人々に「分福＝感情のわかちあい＝平和の実現」がなされることを願って論を閉じたい。

〈註〉

- i 2022/11/14 第1回「環境・共生・協働のコミュニティー教会の将来」研究会 小田部進一 座長の趣旨説明から。
- ii 『ソーシャルワーク専門職のグローバル定義』『社会福祉士の倫理綱領及び社会福祉士の行動規範』より。
- iii 「臨床宗教師 (interfaith chaplain)」とは、被災地や医療機関、福祉施設などの公共空間で「布教しないこと」「宗教協力」を前提に、心のケアを提供する宗教者の認定資格である。「臨床宗教師」という言葉は、在宅医療に尽力していた岡部健医師の「看取りの場になぜ宗教者がいないのか」という問い・いわば医療者側の要請から始まり、欧米の聖職者チャプレンに対応する日本語として提唱された。2011年の東日本大震災を機に、超宗教の宗教者による被災地支援活動がさまざまに展開し、2012年から東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座（公費を充てられないため寄附講座として開始）において理論教育と臨床実習を組み合わせた臨床宗教師研修が始まり、現在では全国の大学や養成機関8カ所で養成が行われている。2022年の時点での会員数は300名ほどで、全国の医療福祉施設や被災地などで心のケアのために活動している。
- iv セツルメントとは、隣保館などと訳され、社会教化事業を行う地域の拠点のこと。この元の意味は「移住」で貧困の解消には金品の供与ではなく社会改良であるとして、19世紀末にイギリスの理想主義的な大学教授や学生が貧民街（スラム）に移り住んで貧民と生活を共にし、その教化にあたったことから使われるようになった。
- v 参考文献 アンゲラ・メルケル『わたしの信仰ーキリスト者として行動する』新教出版社、2018年。
- vi 「スピリチュアルケア」とは、「なぜ生きるのか」「なぜあの人には死んでしまったのか」「なぜ病気になるってしまったのか」などの「答えのない問い」から生まれる苦しみ＝スピリチュアルペインに対するケアをいう。
- vii 2023/12/16 九州臨床宗教師会主催スピリチュアルケア研修会 中井珠恵氏の発表「大切な人を見送った後」より。
- viii 宮本洋子「大学セツルメント「トインビー・ホール」の独自性ーオックスフォード・ハウスとの設立経緯の対比からー」『奈良女子大学人間文化研究科年報』14巻:1998年、11-22頁。
- ix 山本崇記『住民運動と行政権力のエスノグラフィーー差別と住民主体をめぐる〈京都論〉ー』晃洋書房、2020年、86-104頁。
- x 勝野秀敏「釈尊の背中を追うならば～お寺からの出家 四門出遊と代受苦を思う～」臨済宗青年僧の会会報『不二』第108号、2018年、13-14頁。
- xi 勝野秀敏 龍津寺土曜こども寺子屋資料「寺子屋の先生方に心がけていただきたいこと」文末別紙参照①。
- xii 2021/12/23 静岡県社会福祉協議会主催「地域共生推進フォーラム」海老原宏美氏の講演より。なお、この講演の翌日に海老原氏は逝去されて最後の講演となった。いわば命がけの訴えでもあった。
- xiii アンゲラ・メルケル『わたしの信仰ーキリスト者として行動する』新教出版社、2018年、104頁。
- xiv 龍津寺過去帳より。江戸期から子どもの名前が途切れることは一度も無かった。それが1966年（昭和41年）以降、一転して子どもの名前はほぼ見られなくなる。
- xv 日本国憲法第19条【思想及び良心の自由】「思想及び良心の自由は、これを侵してはならない。」
- xvi 「液状化した世界の歩き方」熊谷晋一郎他『わたしの身体はままならない〈障害者のリアルに迫るゼミ〉特別講義』河出書房新社、2020年、38-42頁。

- xvii アドボカシーとは、「擁護・代弁」「支持・表明」などの意味を持ち、貧困問題や人権問題など患者や弱者の権利を保護したり、主張を代弁したりする仕組みのこと。
- xviii ヨシタケシンスケ『このあとどうしちゃおう』プロンズ新社、2016年、7-8頁 文末別紙参照②。
- xix 菊池正治仏教寺院の地域開放とセツルメントー佐伯祐正と光徳寺善隣館 - 『仏教社会事業研究所年報』3巻、1986年、58頁。
- xx 同 58頁。
- xxi 同 59 - 60頁。
- xxii 誰でも自由に利用できる（オープンアクセス）状態にある共有資源（出入り自由な放牧場や漁場など）が、管理がうまくいかないために、過剰に摂取され資源の劣化が起ること。環境イノベーション情報機構「共有地の悲劇」<https://www.eic.or.jp/ecoterm/?act=view&serial=3484>

文末別紙参照④

文責：勝野秀敏

寺子屋の先生方に心がけていただきたいこと
(目の前の方に安心していただき、信頼関係を結ぶために。
年齢性別関係なく、人と認め合い、支え合うために。)

◎ こうだといいな

- ・見守り ・化真聴
- ・受容 ・認める ・名前を呼ぶ
- ・対等・平等 ・基本的に一対一(個別性)
- ・待ってあげる ・安心させてあげる
- ・ひとりも取り残さない ・両手で受け取る
- ・してくれたら、こどもにも「ありがとう」
- ・目の前の人にとって良い環境になる



× 避けてほしいこと

- ・押しつける ・決めつける
- ・封建的 ・上から目線
- ・空気を読ませる ・暴力厳禁
- ・最後まで話を聴かない
- ・脅して言うことをきかせようとする
- ・待たない・認めない・不安にさせる
- ・スマホに頼る・帽子をかぶったまま



※誰かがケガをしそうな危険なことや、心に傷を負わせるようなひどい言葉があったら、その時には、ちゃんと叱っていただければ幸いです。(慈悲の怒りという言葉もあります) その後のフォローもお忘れなく。

龍津寺(りゅうしんじ)土曜子ども寺子屋

